

「霊の導きに従って」

2022年9月25日

ガラテヤの信徒への手紙 5：16～26

佐々木 佐余子

今朝はキリスト者の徳・徳目・霊性についてパウロから学びを与えられたいと思います。見出しを見ると、「キリスト者の自由」「霊の実と肉の業（わざ）」とありますが、具体的にどういうことなのか考えたいと思います。ユダヤ人にとって割礼をするとは大変重要な事でした。割礼をすることによって、神の民として契約を結ぶことになるからです。ユダヤ人だけではなく中東の人たちはいろいろな意味で割礼をするらしいです。ガラテヤの教会に来たユダヤ教派クリスチャンは異邦人である外国人が洗礼を受ける時、割礼をしなさいと教えました。けれど、先見の明あるパウロは大反対しました。そういうことをいつまでもしていたら、せっかくイエスさまが十字架にかけられ、贖いの死を成してくださったのに、何の意味もなくなることだと反対したのです。そしてまた、ユダヤ人であるからには、たとえクリスチャンになっても律法を守らなければいけないと教えていた彼らを、パウロは批判しました。パウロは今まで自ら律法を完全には守れないと悩んでいたのですが、しかし、イエス・キリストを信じることによって義とされ救われたと感じたのです。そのようなパウロが身をもって体験した真理は、すべての人は、ただイエス・キリストの信仰によって義とされ、義とされるとは神の前に正しい者とされる、という意味ですが、義とされ救われるという真理だったのです。洗礼を受けたクリスチャンはその2つのこと、1つは割礼、2つは律法から自由になれるのであり、聖霊がその人に降り注いでくださり、肉なる気持ち、肉なる業から、心を自由に解き放されるのだと教えました。

5章の16節に「わたしが言いたいのはこういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません」とあります。しかし、実際どうでしょうか。人間は弱い動物です。洗礼を受けてもすぐ天使になるわけではあるまいし、いろいろな肉の思いを引きずって生活するのではないのでしょうか。霊の導きに従って歩む時もあるけれども、他方では肉の業に従い、足が交互にもつれあって転ぶ時もあるでしょう。私たちの心にはダブルスタンダード（二重規範）があり悩むのです。そのところを17節で説明しています。「肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです」と語ります。更に18節を読むと、「しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。」そして19節には人間の悪の所業・悪のリストが細かくあげられています。初代教会のクリスチャンたちがこのようなことを少しはしている人たちがいたかもしれないけれど、多くはローマ社会の腐敗ぶりを言っていたのではないのでしょうか。このガラテヤ書が執筆された年代、紀元後57年頃は、悪名高いネロ皇帝の時代でした。彼らは毎日宴会をし、食べた物を吐いてはまた食べ、酒を飲み好色であり偶像礼拝をしていたのです。（皇帝を神としていました）。パウロは天幕の仕事をしていたので、天幕

はローマ兵が遠征する時使われるものです。そのような関係でパウロはローマの貴族社会の暮らしぶりを知っていたに違いありません。パウロははっきり言っています。「このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。」(21節後半)と。

パウロは肉の行いを4つに分類しています。第1のグループは家庭と社会を破壊する罪です。不品行、汚れ、好色など性に関するものです。第2のグループは、天の神への信仰と礼拝を破壊する偶像礼拝、魔術など宗教に関するもの、第3のグループは教会の交わりと人間関係を破壊する敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、妬みなど対人関係に関するものです。嫉みと妬みとはよく似ている言葉ですが、嫉みは他人の幸福や長所を見て、自分にはそれが望み得ないことを不満に思い、相手に悪いことが起こればいいと思う心です。妬みは他人の幸せをうらやんで、そういう生活の邪魔をしたいと思う心です。そして第4のグループは自分自身を破壊する酩酊、遊興など快楽に関するものです。皆さん方は一線を越えないで潔い生活をされていると思うのです。潔い生活とは、思いつきりが良くて立派な生活を言いますが、古くはきれいでさっぱりした生活を指していることもあります。キリスト者はこうした肉の支配から離れて、霊を目指して生活をしているのです。次に霊の実とはどのようなものを言うのでしょうか。ここを読むだけで清々しい気持ちになります。さわやかな風が吹いてフレッシュになります。霊の実は何と言っても愛です。パウロは22節で語っています。霊の結ぶ実は愛であり、「喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」とあります。これはクリスチャンの優れた徳目です。あの当時ローマの不健全な社会の中で、パウロの教えた徳目は際立ったものであり、たとえ教会に行っていない人でも人々の目を目覚めさせたのではないのでしょうか。24節を読むと、「キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです」とあります。この十字架につけてしまったという意味は、祈りの結果、出来ることなのです。こういう困難な課題は祈り無くしてとても出来るものではありません。サタンがうようよしてすきがあればすぐ目をつけて入ろうとしているのです。人間は大体において自分に甘いので、すぐ流されてしまいがちです。それを断ち切るのは祈りしかありません。けれど乗り越えた時、パウロが語ったように、「そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つでしょう」(フィリピ 2:15-16)と教えています。後になって、ローマ皇帝が教会を受け入れ、国教と制定したのも、クリスチャンのこのような愛の行為を学んだからではないのでしょうか、ですからこの清い行いが世俗と教会を分ける分水嶺だったのです。もし、口だけ言って世俗と変わらない行いをしていたら、教会は世俗に飲み込まれて何の価値も無くなっていたでしょう。現在の教会もそうですよね。教会は愛、愛と言っておきながら少しも実践していなければ世俗の人たちと何も変わらなくなってしまいます。勿論教会は有限ですから何でも出来るわけではないけれども、自分の身の回りで出来ることがあれば大変な事だけれど、また損することだけれど、そうなのです。愛を行うことは、自分が、教会が損することなのです。その人に親切をした結果、大損をしてしまった、ということもあ

なのです。初めから冷たくして断ったら何も損はしなかったのです。ここは私の体験から話したことなので、全く違うお考えの方もおられると思います。でも考えるに元々、神は身銭を切って人間のため、イエス・キリストを贈ってくださいました。神は大損をして人のため子供を失ったけれども、人を救うためでした。その子供を最後は復活させ、使命を果たしたお子は、父と一緒に天におられるのです。そう思うと慰められます。25 節ご覧ください。

「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう」と言っています。一人一人が別々に行くなら困難でしょうが、ここに連なる私たちが一緒に歩くならば、良い知恵を神さまからいただきながら、孤児にならないでしょう。パウロが私たちと複数形で言っているのは嬉しいですね。そして一番大事なことを26 節で教えています。「うぬぼれて互いに挑みあったり、妬みあったりするはやめましょう。」と、とどめをさしています。パウロがこういうことを言うからには、ガラテヤのある教会の中では、そういう現象が起きているからです。主イエスの十字架を信じて贖われ清められてはいるけれども、それで罪がすっかり 100%なくなってしまったわけではない。もしそうなら、洗礼を受けたらもう教会に来なくてもいいはずです。けれども人間は生きている限り死ぬまで、この生身の体は罪性に留まるのです。ですから生涯、教会生活をし、信仰が与えられるようイエスさまに頼って生活しなければならぬのです。自分で自分を救うことは出来ないのだから、主イエスに罪を清めていただき、救っていただく他はありません。人間の嫉み・妬みはどうしても起きやすいのですけれど、タラントンの教えは慰められます。新聞等を読むと、沢山のタラントンを与えられている人が登場します。これが同じ人間なのかと思うぐらいです。皆さん方もよく知っている譬話ですが、ある家の主人が遠い旅に出かけるのです。それで僕たちにそれぞれお金を預けます。その僕の力に合わせて、5 タラントン、2 タラントン、1 タラントンです。1 タラントンは今の日本円に換算すると何と約 263 万円です。5 タラントンはその 5 倍ですから 1300 万円ぐらい、2 タラントンは 526 万円です。すごいですね。そんな大金を僕たちに預けたのです。このお話は天国のお話なのですが、人生の意味は神から与えられた自分の分をどのように働かせるかを教えています。タラントンはその人の才能・賜物です。やがて主人が帰ってくると皆どのくらい儲けたかを報告しました。5 タラントンの僕は良い商売をしてもう 5 タラントン儲けました。2 タラントンの者も頑張って 2 タラントン儲けました。ここで嬉しいことは、同じように 2 人を褒めたことです。「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」と 5 タラントンの者と同じ言葉で褒めたのです。ここに慰めを見出します。私は 2 タラントンだからと卑下しなくてもいいのです。一生懸命働けば神さまはほめてくださる。喜びの福音ですね。この当時、今日の銀行に似た制度があって、預けられたお金は 1 割ぐらいの利子が付いたそうです。今から見たらすごい高金利です。1 タラントンの僕はそれもせず、ただ地面に埋めておいただけでした。そして怒られました。「怠け者の悪い僕だ。それなら、銀行に入れておくべきだった。そうしておけば、帰ってきたとき、利息付きで返してもらえたのに」と言われ、1 タラントンも取り上げられ外の暗闇

に追い出されてしまったのでした。(マタイ 25:14~30) 教会でもこの譬話は通用するのです。教会で何か少しでもお役に立てるとうれしいですね。その業を神さまは少しずつ大きな業に変えてくださいます。このような人を知っています。以前は教会の活動に消極的な人でしたが、どういうきっかけがあったのかわかりませんが、それまでとはうって変わって教会の奉仕をして下さるようになったのです。ある人は言いました。「これが神業よ」と。本当に神さまは何をしてくださるかわかりません。そして、全体的に言うと、七里教会は今いい方向に進んでいます。絶対無理だと思っていた門が開けられようとしています。その門の扉は長い間さびて開かずの門になっていたのですが、これから少しずつ開かれるでしょう。霊のお導きに従って歩みましょう。